

大岡信

谷川俊太郎編

声でたのしむ

# 美しい 日本の詩

和歌・俳句篇

岩



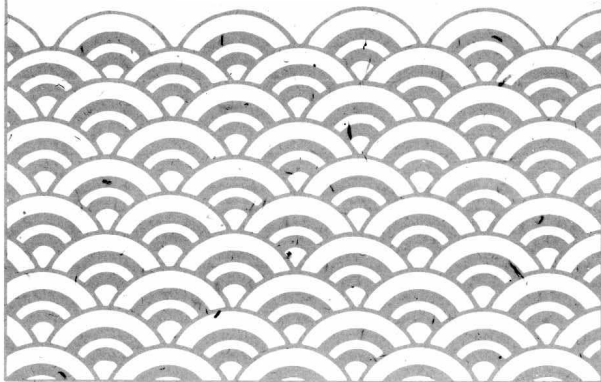
美しい日

声でたのしむ

大岡信  
谷川俊太郎 編

江苏工业学院图书馆  
和歌・詩  
藏書章

岩波書店



声でたのしむ美しい日本の詩 和歌・俳句篇

一九九〇年六月七日 第一刷発行 ©

定価一四〇〇円  
(本体一三五九円)

編者 大岡 信  
谷川 俊太 郎

発行者 安江 良介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋二五五  
発行所 株式会社 岩波書店

電話 〇三・六五・四二二

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan  
ISBN 4-00-000823-4

## はじめに

大岡 信

メソポタミアとかエジプト、あるいはインド、中国。それらの土地で文字というものが発明され、そのおかげで遙か遠方の人々にまで知識を普遍的に伝えることができるようになったのは、人類の歴史にとって最大の事件のひとつでした。

私たちには、この日本の島の上ではじめて大陸渡来の文字というものを目にし、驚きと好奇心に満ちてそれを使いはじめたであろう六世紀、七世紀のころの人々のことは、ほとんど想像もできないほどになってしまいました。が、それまで声とジェスチャーの言葉だけでお互いの意思を通じ合わせていた人々にとっては、文字という新しい、強力無比な伝達手段の出現は、どれほどすばらしい出来事だったか知れません。なにしろ、声や音の届く範囲の人々との、その場限りの会話や意思伝達しかできなかった人たちが、文字の導入によって、何百キロ先の相手にでも通信できるようになったのですから、文字の偉力は絶大でした。

もともと詩歌は、地球上のあらゆる民族にとって、その民族の言語の発生とともにあった、喜怒哀

楽や祈りの最も重要な表現手段でした。文字の出現より遙か以前から、すでにおびただしい詩歌が音声言語や身振り手振りによって歌われ、演じられていたことは言うまでもありません。そのような詩歌の長い歴史は、文字の導入後、一層豊かなものとなって人々の心の糧となっていました。声と文字とは決して対立・矛盾するものではなく、文字という新しい手段を通すことによって、ある一つの詩歌作品が何百万人ものそれぞれ別個の声として甦ることも可能になったのです。

この「声」の中には、文字を目読しているだけで心の中に湧き起こる「内心の声」も含まれます。一千年前の詩歌がほんとの意味で私たちのものになるのは、目という器官を通して、実は私たち一人の心の中でそれらの文字が音となり声となって了解されるからではないでしょうか。目が声を呼び起こすときはじめて、詩歌作品は真に具体的に読者一人一人のものとなるのだと私は思います。なぜかといえば、普遍性をその最高の属性とする文字そのものが、本来、声と離れて存在するものではないからです。

私たち日本人は漢字という素晴らしい文字言語を日常使っています。漢字は一字一字が意味を表わしていますから、その意味だけを取り出して考えれば、声とは無関係であるようにも思えます。しかしそれは違います。漢字の本家である中国の詩人たちは、詩を作るのに意味だけを切り離して書くようなことは決してしませんでした。韻を整えることに漢詩作法の最も基本的なルールがあったことを思い出すだけで十分でしょう。

まして、アルファベットのような表音文字を用いて書く全世界大多數の民族の場合、文字と音声との緊密な結びつきについてはあらためて言う必要もないでしょう。私たちは表音文字で綴られた詩を読むとき、日本の詩歌を読むときよりかなり顕著に、それらの音に対して敏感になっているはずです。それはアルファベットその他の表音文字が必然的に要求する読み方なのです。

日本の詩人たちも、言葉の本質をなす音声に鈍感であることは許されませんでした。

『紫式部日記』の中に、一条天皇の中宮彰子が父藤原道長の邸に帰って皇子を産むくだりがあります。皇子誕生の祝宴に侍った女房たちの一人である紫式部は、このような祝宴の際のたしなみとして、酒を賓客たちにつきながら詠みあげるべき祝賀の和歌を一首作ってその場にのぞみましたが、居並ぶ高位の面々の中に四条大納言藤原公任きんとうがいたために、女房たちが口々に「どうしよう、恥ずかしい。歌の出来不出来は仕方がないけれど、ちゃんとした声こゑづかいで詠みあげることができそうもないわ」とひそひそ言い合うさまを日記に書きとめています。

公任は当時の歌界・歌学界の第一人者と目された人で、有名な『和漢朗詠集』の編者でもあり、藤原一門の大家でした。和歌・漢詩における才のみならず、詠歌や管弦の道にも傑出したいわゆる三船の才の持主で、女房たちが尻ごみしたのも、公任の前で自作の和歌を詠みあげながら彼の盃に酒をすすめる役がまわってくるのを恐れたからです。「歌をばさるものにて、こわづかひよいひのべじ」、つまり歌の出来ばえよりもむしろ声をあげて詠じることの方を彼女らが気にしたというのは面白いこ

とです。紫式部は日記に自分がその時用意して行った歌を書きつけていますから、歌の出来ばえには自信をもっていたでしょう。しかし、公任の前で声をあげて自作を詠みあげることについては、やはり気おくれを感じていたと思われます。

ずっと時代がくだって、元禄時代の俳諧の文句なしの巨匠である松尾芭蕉は、弟子たちに作句の要諦としてしばしば「舌頭に千転せよ」と教えました。句というものの本質が音声と切っても切り離せないものであることを、これほど簡潔に言い切った言葉も少ないでしょう。

短歌形式（五七五七七）、俳句形式（五七五）をはじめとして、日本の詩型には古来かなりの種類の形式がありました。歌謡の面白さの重要な一因も、七五調を基盤にした詩型の工夫のみごとさにあります。

それらすべてを通じて、文字で表記する場合、「、」とか「。」、括弧（「」・（））、疑問符（「？」）、感嘆符（「！」）など、広い意味での句読点はいっさい使われていませんでした。現代の活字本になった歌謡集などでは句読点がついているものもありますが、これは現代の読者の便宜を考慮して新たにつけられたものです。

なぜ句読点がついていなかったかといえば、句読点の助けがなくてもそれらの和歌や俳諧、歌謡を理解することができたからです。詩歌はくちずさめばわかるものというのは当然の前提でした。なぜなら、元来音声には句読点などないからです。音声に出してみてもわかる作品なら、文字で書いた場合

に句読点をつける必要もないわけでした。

日本の文字表現における句読点の歴史はまだ百年そこそこです。句読点は、書かれたものの論理的な理解を容易にするための記号です。「意味」をとりやすくするための便宜的手段として、明治初年代に、西洋の書物の翻訳とともに日本語の中に入ってきたものでした。

詩歌の中に句読点が使われるようになったのは、大まかに言えば大正時代からです。

短歌の中でも、一時期の若山牧水、前田夕暮、また長期にわたって句読点を使った釈道空の例などがありました。それらは短歌世界の異端で、周知のように現在でも、俳句はもちろんのこと、短歌においても句読点はめったに使われていません。

それに比して、大正期以後の自由詩（近代詩・現代詩）においては、テンやマルはもちろん、括弧や感嘆符、疑問符などを使用するのは当たり前になりました。

それは言うまでもなく、詩における論理的要素の強調、意味の重視ということと切り離せない現象でした。そこに、伝統的な定型詩である短歌や俳句と、近・現代詩との大きな違いが、いわば象徴的にあらわれていると言うこともできるのです。

現代詩は黙読されることを要求する詩であると考える現代詩人が存在するのも、これと深く関連した現象でしょう。もっとも、私は真に黙読のみに値する詩というものがそんなにあるとは思いません。むしろ、一篇でもそのような詩があるなら、それは稀有の出来事だと言うべきでしょう。なぜならそ



れは、言語の本質に敢然と逆らって打ち樹てられた瞠目すべき奇跡的作品であるはずだからです。私はまだそのような作品に出会ったことはありません。

ここに谷川・大岡兩名が二冊に編み、本およびコンパクト・ディスクの形で刊行するアンソロジーは、古代から現代までの日本の詩歌作品を、声を通して読み、鑑賞するという観点に立って編集し、和歌・俳句篇および近・現代詩篇の二巻としたものです。

編纂の背景をなす考え方は、以上のべたようなところにありますが、根本的な動機としては、現代日本社会において言語表現が置かれている立場に対する危機感があると言えると思います。これはその意味で、言葉の力を再確認し、強化するための一つの試みとして編まれた本だと言えるでしょう。その言葉の力は、決して大声で叫ぶところに生じるわけではなく、むしろ静かに、明確に、リズムをもって、ある時は莊重に、またある時は軽やかに、しかし常に一語一語の働きを最大限に生かすようにして書かれ、声に発せられるところに生じるものであることを、これらの詩歌作品は立証していると思います。

このアンソロジーのために作品を提供して下さった作者の皆さんに御礼申しあげます。

コンパクト・ディスクのために作品を朗読して下さった平井澄子、松本幸四郎、岸田今日子、橋爪功、牧良介の五氏には、録音の作業中私たち兩名が与えられた喜ばしい驚きの数々に対して御礼申しあげるとともに、多くの方々がじかに同じ喜びと驚きを共にして下さるに違いないという気持ちをも

ここに付け加えさせて頂きます。

編集作業の開始から録音その他全部が終るまでには、思いのほか時間がかかりましたが、二巻を通じて編者両名の合議によって編まれたものです。現代詩の選択については、耳で聞くことを第一目的としたので、他のアンソロジー類とはかなり異なった性格のものになっていると思います。

本文の下欄には、それぞれの作品の鑑賞の手引きとなると思われる注記をつけました。屋上屋を架する愚におちいっていないことを願っております。この注記は、和歌・俳句篇を大岡、近・現代詩篇を谷川が担当しました。

(一九九〇・四)

## 凡例

- ・本書では、古代から現代までの和歌・俳句・歌謡・連句の中から、声で読むという観点に立って、三四六の作品を選んだ。
- ・作品は、各ジャンルごとに原則として作者の生年順としたが、活躍した時期など文学史的事実も考慮して配列した。
- ・表記については新字体を用い、仮名づかいはテキストに従った。また、鑑賞の便のため、新仮名づかいで振り仮名を付した。
- ・鑑賞の手引となる脚注をつけた。

## 目次

|       |       |       |
|-------|-------|-------|
| はじめに  | ..... | 大岡 信  |
| 古典和歌  | ..... | 1     |
| 近代短歌  | ..... | 59    |
| 歌謡・連句 | ..... | 109   |
| 近世俳句  | ..... | 123   |
| 近代俳句  | ..... | 143   |
| あとがき  | ..... | 谷川俊太郎 |
| 索引    |       |       |

装幀 安野光雅

# 古典和歌



秋の田の穂の上に霧らふ朝霞  
何処辺の方にわが恋ひ止まむ

磐姫皇后

われはもや安見児得たり皆人の  
得難にすとふ安見児得たり

藤原鎌足

生没年未詳

晩秋の田の面に垂れる稲穂。その上に重く漂う朝霧（霞の語は古代では霧をも意味しました）。いったいどの方角にむけてこの霧は晴れてゆくのだろう。そしてこの霧きながらの私の恋は？ 第十六代仁徳天皇の皇后磐姫皇后は、情熱的で嫉妬深いお后という伝承があり、この歌も、後世の恋歌が皇后のそういう性格に合わせて彼女に仮託されたものでしょう。上句（かみのく）の自然描写と下句（しものく）の心理の重ね合わせ方がみごとです。

三六六

藤原家の祖鎌足。天智天皇の右腕ともいふべき重臣でした。その人物が、采女（うねめ）安見児（やすみこ）について手に入れた勝利の凱歌をあげています。この種の恋の勝利の歌は日本詩歌史に珍しいもの。

安倍女郎あべのいらつめ

いまさら  
今更いまさらに何をか思はむうちなびき  
こころは君によりにしものを

額田王ぬかだのおおきみ

君待つとわが恋こひひをればわが屋戸やどの  
すだれ動かし秋の風吹く

生没年未詳

『万葉集』にはこれと並んで同じ作者の次の歌もあります。

わが背子は物な思ほし事しあら  
ば火にも水にもわれ無けなくに  
女の方が男に比べひたぶるに恋に  
生きていることは明らかです。男  
は気弱で体面のことなど気にして  
いるのでしょうか。それが女にはじ  
れたたくもあり、いとしくもあり  
……。

七世紀の人

『額田王、近江天皇(天智)を思(し)  
の(ひて作る歌』とあります。彼  
女は大海人(おおあま)皇子の妃で  
したが、のち皇子の実兄天智天皇  
の妃の一人となりました。相手の  
訪れを心待ちにしている女性。ほ  
んのかすかな物音や動きにさえ胸  
がときめいて。



大<sup>おお</sup>伯<sup>く</sup>皇<sup>ひめ</sup>女<sup>みこ</sup>

わが背<sup>せ</sup>子<sup>こ</sup>を大<sup>やまと</sup>和<sup>と</sup>へ遣<sup>や</sup>るとさ夜<sup>よ</sup>深<sup>ふ</sup>けて  
曉<sup>あかときつゆ</sup>露<sup>ゆ</sup>にわが立<sup>た</sup>ち濡<sup>ぬ</sup>れし

志<sup>し</sup>貴<sup>きの</sup>皇<sup>み</sup>子<sup>こ</sup>

石<sup>い</sup>ばしる垂<sup>たる</sup>水<sup>みづ</sup>の上<sup>うへ</sup>のさ蕨<sup>わらび</sup>の  
萌<sup>も</sup>え出<sup>い</sup>づる春<sup>はる</sup>になりにけるかも

空<sup>そら</sup>一<sup>いち</sup>七<sup>しち</sup>

伊勢神宮に齋宮として仕えている大<sup>お</sup>伯<sup>く</sup>皇<sup>ひめ</sup>女<sup>みこ</sup>のもとに、同母弟大<sup>お</sup>津<sup>つ</sup>皇<sup>み</sup>子<sup>こ</sup>が一夜ひそかに訪れました。どんな重大な話かわされたのかはもとよりわかりません。姉は早<sup>はや</sup>曉<sup>あけ</sup>、朝露に濡れながら、愛するただ一人の弟が大<sup>やまと</sup>和<sup>と</sup>へ帰るのを見送りま<sup>す</sup>。日ならずして大<sup>お</sup>津<sup>つ</sup>皇<sup>み</sup>子<sup>こ</sup>は反逆の汚名をきせられ、処刑されます。皇女が胸おののかせて見送った弟は、あれきり見おさめとなりました。姉弟の別れなのに、この歌にはさながら恋人同士の別れのような熱い思いが感じられます。

未<sup>み</sup>詳<sup>しやう</sup>七<sup>しち</sup>六<sup>ろく</sup>

「石ばしる」は石の上を激しく水が流れるさま。「垂水」は滝。古来、春の名歌として愛誦された歌。